

《学界展望》

故 G・D・H・コール教授について

都 築 忠 七



英国の進歩的思想界で当然の存在とみなされていたコール教授が亡くなって、すでに二年以上になる。私も教授の晩年、オックスフ

ordの存在を当然のものと考えていただけに、教授の突然の死は、個人的にも大きな衝撃であった。コールに関する私の思い出は、それ自体、とりとめのないものであるが、私はこの小論を、「学界展望」というよりむしろ、おくればせの obituary として、教授の人と思想との発展をあとづけるものにしたと思う。

* * *

オードで、ルソーやバーナード・ショウに関する講義をきいたり、教授を中心として国際社会主義の諸問題を議論する Labour Club や I. S. S. S. (International Society for Socialist Studies) の集会に出席したり、 All Souls College にある教授の研究室や、ロンドン郊外 Hendon の自宅を訪れて、研究上の助言をうけたりして、 Professor

George Douglas Howard Cole は、一八八九年九月二十五日、ロンドン西郊 Ealing の実業家、不動産仲介業を営む George Cole の一人息子として生まれた。

この年、一八八九年は、ロンドン港湾労働者のストラ

イキを契機として、未熟練労働者の組織化が進められた年であり、また *Fabian Essays* が出版された年でもあった。もっとも、少年時代のコールの思い出は、これらの、そしてその後の、英国労働運動にとって劃期的な事件——一八九〇年代の独立労働党 (I. L. P.) の開拓的な仕事や、一九〇〇年の英国労働党の成立など——に、直接ふれるものではなかったようである。しかし彼は、十六歳のとき、William Morris の *News from Nowhere* を読み、「突然、そしてとりかえしのつかないように」⁽¹⁾「ユートピア社会主義者」になったと自ら語っている。Morris のこのユートピアは、議会政治と機械文明のみにくさを否定し、手工業的な労働の質と、田園生活の静止的な美しさを背景とした、人間フェロウシップの夢を描くものであるが、コールにたいする Morris の影響は、彼の社会主義思想の根底を形づくるものとなった。彼が Morris のメッセージとみなしたものは、労働の質と生きることの質とが、不可分なものであり、労働の組織は人間の自由を保証するもの、したがって労働の規律は自律的であるべきものということであった。⁽²⁾しかし、コールが社会主義をうけ入れたのは、経済的または政治的な

学説としてよりも、包括的な生活態度としてであって、もし彼が労働者であったならば、Robert Blatchford の、党派にとらわれない、理想主義的な Clarion の社会主義運動に参加したであろうと自らのべている。⁽³⁾事実、彼の社会主義は、ただちに実践と結びつけられ、一九〇八年、まだ St. Paul's School の生徒であったとき、彼は Ealing の I. L. P. 支部に入党した。この年、オックスフォード大学 Balliol College に入るにおよんで、ただちにフェビアン協会の大学支部に加盟し、入学第二週目には、*Oxford Socialist* という雑誌をはじめている。大学では、彼は詩をたしなみ、また優秀な学業成績を示して、一九一二年には Magdalen College の Fellow に選ばれた。当時の彼の思想に、大きな影響をあたえたものは、彼自身のルソー研究と、英国の労働不安とであった。

(1) Cole, *British Labour Movement-Retrospect and Prospect* (1951), pp. 3f.

(2) Cole, 'William Morris and the Modern World', *Persons and Periods* (1938), pp. 284—306 *passim*.

(3) Cole, *British Labour Movement*, pp. 4—5.

彼は、ルソーに関する大きな研究書を書く準備を進めたが、大戦の勃発によってこれを放棄した。しかし、*Du Contrat Social* の他三篇を英訳し、これに長い序文をつけて、一九一三年 Everyman's Library の一冊として出版した。彼は、国家を組織する人間が、社会の一般意志 (*la volonté générale—the general will*) によって自由であることを強要されるという、ルソーの考え方を重要視し、この一般意志は、*good government* だけでなく *self-government* をも要求するものとして、これを彼の新しい政治哲学の出発点とした⁽¹⁾。他方、一九一〇—一二年、運輸労働者を中心として英国各地にひろがったストライキの波は、戦闘的な *Syndicalism* と *Industrial Unionism* の思想をその波頭に示しながら、彼の大学生生活に大きな刻印をのこした。当時彼は、自由党との提携によって無力化した労働党にたいし、きわめて批判的であり、そうした労働党を攻撃することは、「死んだ馬にむちうつにひとしい」ものと考えた⁽²⁾。彼はまた Lloyd George の国民保険法 (一九一一年) などの、ビスマルク的社会改良政策のもたらす国実権力の強化——Hilaire Belloc の指摘する *'Servile State'* の危険にたいして敏

感であった。

(1) Cole, Introduction to Rousseau's *Social Contract* (Everyman's Library, 1923 ed.), pp. xxxviii—xli. Cole, *Essays in Social Theory* (1950), pp. 113—131 を参照。

(2) Cole, *The World of Labour* (1913), p. 395.

こうした状況のもとに、フェビアン協会の漸進主義に満足しない知識人の運動として、ギルド社会主義が擡頭した。A. J. Penty の *The Restoration of the Guild System* (1906) の中に示された、資本家から解放された独立生産者ギルドという考え方は、A. R. Orage と S. G. Hobson とによって、*New Age* 紙上 (一九一一年) で、ナショナル・ギルドの構想へと発展させられた。それは、分配したがって消費者の利益に重点をおく *Collectivism* と、生産者の立場を強調する *Syndicalism* とを総合し、産業の所有権を国家に帰属させ、その実際の管理と労働組合に委ねるという提案であった。コール自身、オックسفোর্ドの友人 William Mellor とともに *'Greater Unionism'* の運動をはじめ、産業国有化と労働組合の産業別再成を通して、労働者による生産管理の確立を提唱

した。

一九一三年には、コールの出世作ともいふべき *The World of Labour: A Discussion of the Present and Future of Trade Unionism* が出版されたが、それは、ヨーロッパ・アメリカの労働運動の歴史をあとづけ、その将来を展望するもので、後の彼の幾多の著作の原型をなすものであった。同時にそれは、生産者による産業の自律的支配——それ自体 Morris のユートピアであるが——を通じて、ルソーの平等の原則にもとづく「新しい集団の哲学」をうちたてようとするものであり、統制と機能の分散化と、その相互調整とによって、議会主義とは異った民主主義を樹立し、これによって国家を、ルソーの「一般意志」の実現の手段にしようとするものであった。

当時コールは、Mellor とともに、Fabian Research Department (F. R. D.) の指導者として活躍した。この組織は、一九一二年、Webb 夫妻によって、労働運動の調査機関としてつくられたものであるが、コールは Webb 夫妻を「bureaucratic collectivism の真正正銘の代表者」とみなしていた⁽¹⁾。他方、Beatrice Webb は、自分たちは、'B's', すなわち 'bourgeois, bureaucratic, benevolent'

であり、コールなどは 'A's', すなわち 'aristocratic, anarchist and artistic' であるといっているが、それは両者の性格および社会主義の諸問題にたいする接近の方法の相異を示すものとして興味深い。Beatrice はまた、コールについて次のように語っている——彼は「H. G. Wells 以来の、もっとも有能な新来者である。しかし彼は、許すことを知らず、がまんすることができず、そして今のところ、あまり実際的でない」と⁽³⁾。当時コールは、フェビアン協会そのものを、彼の新しい政治哲学に改宗させようとしていた。一九一四年、彼は協会の執行委員に選ばれたが、協会の綱領を「資本主義制度からの社会の解放」という一点にまとめて、協会から自由党支持者をしめ出そうとはかった。もっとも、一九一五年五月のフェビアン協会年次大会で表決に敗れ、その場で彼は協会から脱退している⁽⁴⁾。しかし F. R. D. そのものは、ギルド社会主義の影響下に入り、一九一六年、コールを名誉書記長にもち、一八一八年には、その名を Labour Research Department (L. R. D.) とあらためて、フェビアン協会との関係を絶つようになった。コールをはじめとするギルド社会主義者は、すべに George Lans-

bury の *Daily Herald* とも協力し、一九一五年には National Guilds League を組織したが、産業民主主義を労働組合に浸透せよという彼らの努力は、必ずしも成功しなかった。一方、Beatrice Webb は、ひろく労働者組織との連絡をたもつ調査機関を欲しており、またコールなどの理想主義的な努力にも同情をもっていたので、表面上の相異にもかかわらず、両者の協力関係はむしろ緊密となり、F. R. D. L. R. D. も、事実の調査収集という Webb 的な伝統を維持することができた。

- (1) Cole, 'Beatrice Webb as an Economist', *Economic Journal* (Dec., 1943).
- (2) Margaret Cole, *Beatrice Webb* (1946), pp. 65—66.
- (3) Margaret Cole (ed.), *Beatrice Webb's Diaries* (1952), p. 24.
- (4) E. R. Pease, *The History of the Fabian Society* (1925 ed.), pp. 230—1.

コールにとって、F. R. D. での活動から得られた今ひとつの収穫は、その書記長をしていたケンブリッジ大学出身の Margaret Isabel Postgate との結婚（一九一八年）であった。Beatrice によれば、この二人は「完全な知的な同僚」であった。「コールは政治上の指導者たらんと

準備しているが」と、Beatrice はつけ加えている——「行く道は困難である。彼は C. O. (Conscientious Objector)——良心による戦争反対者——として一生マークされる。……新しい Shop Steward (職場指導者) の運動は、集中的なナショナル・ギルドに関する彼の精巧な提案に無関心であるばかりでなく、敵意をもっている。……一方、その精密な頭脳のみといった激動から、その長い指の先にいたるまで、知識人であり一種の貴族であるコールは、我々よりももっと急速に、労働指導者について幻滅を感じるようになっていく。それにもかかわらず、彼は勝ちぬくであろうと思う。しかし、彼が克服しなければならぬものは、古い人間や古い運動ではなく、彼よりももっと極端な、新しい関心のうねり、新しい指導者のデモゴギーであろう。」一九一八年十一月七日の日記にしろされた Beatrice のこうした言葉は、第一次大戦後のコール夫妻の、社会主義遍歴の困難さを、

- (1) *Diaries*, pp. 135—6.

* * *

先の Beatrice からの引用がふれているように、第一次大戦中、コールは C. O. であり、しかも、軍事法廷によび出されながらも兵役を免れたのは、彼がその顧問として活躍していた機械工組合 (A. S. E.) の圧力によるものであった。しかし彼の戦争反対は、おそらく人道主義的な立場にたつものであり、一九一五年に出版された *Labour in War Time* の中で、「世界の歴史は二つの戦い——国民と国民との戦いと階級と階級との戦い——の歴史であった」とのべて、「ある種の社会主義論の純粹に階級意識的なコスモポリタン」の考え方とは、一線を劃している⁽¹⁾。彼は、C. O. の多し I. L. P. の中において、特に戦争の即時停止を要求する国際社会主義者のストックホルム会議の計画達成に努力したが、他方、一九一八年春のドイツ軍攻勢にあたり、緊迫した事態を反映して、労働者のストライキ停止を勧告するほどであった⁽²⁾。

(1) Cole, *Labour in War Time*, pp. 8, 21.

(2) R. Postgate, *George Lansbury* (1951), pp. 176, 179.

その間労働党は、一九一八年に、Sidney Webb と Arthur Henderson とにちやうど作成された新しい綱領を採用し、名実ともに社会主義政党に発展し、まもなくコールは、Henderson の顧問として、Webb の後継者と自任するようになった。他方、戦後の労働不安の悪化に伴い、産業上の問題でもコールと Henderson との協力関係は密接となり、一九一九年の National Industrial Conference にたいし、労働組合側を代表して、この二人のまとめた覚え書は、ギルド社会主義的な労働者の生産管理を含む、一連の提案を行っているが、それは、労働組合に強く働きかけようというコールの努力の、ひとつの成果であった⁽¹⁾。また一九二〇年、I. L. P. がその常設組織として、はじめて総評議会 General Council を設けたとき、それが労働運動の統帥機関となるように、Ernest Bevin をたすけて、その草案を作成したのもコールであった⁽²⁾。

(1) Cole, *Chaos and Order in Industry* (1920), Appendix I.

(2) Alan Bullock, *Ernest Bevin* (1960), p. 147.

この頃、彼は相づき *Self-Government in Industry* (1917), *Trade Unionism on the Railways* (R. Page Arnot と共著) (1917), *An Introduction to Trade Unionism* (1918), *Labour in the Commonwealth* (1918), *The Meaning of In-*

Industrial Freedom (Mellor と共著) (1918), *Chaos and Order in Industry* (1920), *Social Theory* (1920), *Guild Socialism Re-stated* (1921) などを著し、その中で、彼のいわゆる「科学的ユートピア主義」の普及につとめたが、同時に彼自身の思想も、ひとつの飽和点に達したように思われた。彼によれば、社会は力と法律との関係ではなく、意志の問題であり、社会組織の目標は、社会を構成する各個人の、もつとも完全な自己表現を確保することである⁽¹⁾。しかし民主的な代表政治を考える場合、個人をそのまま完全に代表することは不可能であり、社会内部の個人の機能に応じた機能的な代表のみが可能である。中世の独立生産者ギルドは、その限られた枠内で、それを構成する個人の自律と公共道徳との上に作られた組織であり、ギルド社会主義は、社会の機能的代表制度の中に、こうした中世ギルドの「精神」を復活しようとするものである。それは二十世紀の社会においては「産業民主主義」であり、その組織は、生産者の側では産業別ギルド、消費者の側では主として消費協同組合、そして公共のサーヴィスについては、教育ギルド、保健ギルド、司法ギルド、教会ギルド、陸海軍ギルドなど、一切、自律

的、自治的なものである。こうした機能的な組織のほかに、それらの調整機関として国家が考えられるが、これまた、地方別、地域別、および全国的な「コミュニティ」として組織される。こうした「科学的ユートピア」を達成する方法は、暴力革命ではなく、産業および地方政治の各分野における「詳細な権力の掌握」という、「進化論的プロセス」であり、その推進力は、労働組合の発展——組合の産業別再編成と組合内部の民主化——であって、彼はこれを、「既成の統制力を蚕食する」(Encroaching Control) 政策とよんでいる。以上は、コールの理想社会の青写真の概略であるが、その基本的な考え方は、最後まで、彼の思想の根底に流れるものであった。

(1) Cole, *Social Theory*, pp. 6, 203, 208.

(2) Cole, *Guild Socialism Re-stated*, *passim*.

一方、ギルド社会主義の運動そのものは、ロシア革命の影響をうけて分裂し、やがて急速に衰えて行った。Mellor などの左派は、一九二〇年の英国共産党創立に参加したが、S. G. Hobson その他、Bolshevism に反対する右派は、一九二〇—二二年、マンチェスターを中心に、建築労働者の一種の生産協同組合として、National Build-

ing Guild を組織した⁽¹⁾。コールは中間派に属し、ロシア革命を支持した一方、プロレタリアート独裁を英国に適用することに反対した。実際面では彼は、右派の Building Guild の実験にも関係し、同時に L. R. D. の中では、共産党員とも協力し、一九二一年、Palme Dutt が *Labour Monthly* をはじめたときには、これを援助さえした。しかし、建築ギルドは、財政困難のためにまもなく崩壊し、コール夫妻は、National Guild League にあって、*Guild Socialist* という雑誌の編集をつづけたが、これも一九二三年には発行を停止した。他方、共産党の勢力の増大する L. R. D. 内部におけるコールの地位は、ますます困難なものとなり、一九二四年には、辞職せざるを得なくなった。事実、このときまでに、彼の「科学的ユートピア」の夢は、ほとんど消えていた。

(1) Cole, *A Century of Co-operation* (Manchester, 1944), pp. 285—292.

彼は、第一次大戦前しばらくの間、ダーラム大学で哲学を教えたこともあったが、その後はロンドンにいて、前述のように労働運動に没頭していた。そして一九二三年、病氣静養中に、妻の Margaret とともに探偵小説の

執筆をはじめ、同年出版された *The Brooklyn Murders* をはじめとして、その後三十をこえる、こうした種類の小説を出版している。Margaret によれば、それは「きわめて無邪気なたちの逃避主義」であるが、同時にその筋書きの作成には、「整然とした知性、時間と距離のよいうな詳細な事実にたいする注意」を必要とし、それ自体、歴史研究家の余技としては、格好なものであったようである。当時彼は相ついで、労働党諮問委員会組織責任者、*Manchester Guardian* 労働問題担当記者、ロンドン大学成人教育部長などの職についたが、ギルド社会主義運動の終焉とともに、落ちついたアカデミックな仕事を欲するようになり、一九二五年、オックスフォード大学 University College の Fellow および大学の経済学講師として、再びオックスフォードへ帰ることとなった。

(1) Margaret Cole, *Growing Up into Revolution* (1949), pp. 179—180.

* * *

オックスフォードでは、社会主義の、ほとんど最古参ともいべき彼の周囲に、一群の進歩的な学生が集つ

た。その中には、後の労働党党首 Hugh Gaiskell⁽¹⁾、人民戦線派の詩人 W. H. Auden、経済学者の Colin Clark などがあった。Gaiskell は、その追想記の中で、コールが労働運動のバイオニアたちに示した人間的興味から、深い感銘をうけたとのべている⁽²⁾。当時コールは *The Life of William Cobbett* (1924)、*Robert Owen* (1925) のような伝記を書き、ついで Daniel Defoe の *Tour through the Whole Island of Great Britain* (1927) や Cobbett の *Rural Rides* (1930) のような、社会観察の記録の決定版を編集している。彼は Defoe にたいし、「古い社会秩序から新しいそれへの推移を象徴する人」として、そしておそらく彼自身と同様に、「エレガンスをもたないが、しかし短刀直入に、力づよく、しかも簡素に、言葉の出るままに筆をとる」そして「書くことを止めることのできない」人として、親近感を抱いていたようである。しかし、彼がもっとも強くひかれたのは、おそらく Cobbett であるが、これまた「社会的推移のトリビュン」として、彼自身と同じく田園生活の愛好者として、そして何よりも典型的な英国人としてであった。Gaiskell がコールの中に、農村的で保守的な南部英国の好み、産業革命前

の英国にたいするノスタルジア、さらには保守党よりも自由党にたいするより大きな嫌悪の情を見出したのも、コールと Cobbett との共通点を示すものとして興味深い。

(1) Gaiskell, 'At Oxford in the Twenties', *Essays in Labour History* (ed. by Asa Briggs and John Saville) (1960), p. 11.

(2) Cole, *Persons and Periods* 参照。彼はその後 *Charlist Portraits* (1941) の中で、'Fabian Biographical Series' の一部として *William Cobbett, James Keir Hardie, Richard Cartile, John Burns* のような Dictionary of National Biography の中で 'H. M. Hyndman' なる書いている。

一九二〇年代後半の、オックスフォードでの学生生活は、たしかに彼にとっての多岐多岐のものであった。一九二五—二七年、彼は *A Short History of the British Working Class Movement* (3 vols.) を出版したが、それは、今までの彼の労働運動史研究の集大成であり、*Common People* (R. Postgate との共著) (1938)、*A Century of Co-operation* (1941)、*British Working Class Politics, 1832—1914* (1941)、*A History of the Labour Party from 1914* (1948)、

Attempts at General Union (1953), British Working Class Movements, Select Documents 1789—1875 (A. W. Fison との共編) (1951) などの、後の諸研究の出発点をなすものであった。

オックスフォードでは、彼はこうしたアカデミックな仕事のほかに労働者教育協会 Workers' Educational Association (W. E. A.) のための活動を継続し、Margaret 夫人もこれに協力した。W. E. A. は、労働者に高い水準の教養と教育をあたえる目的をもって、一九〇三年、オックスフォードで作られたものであるが、一九二一年には、労働組合その他、多数の団体の支持をうける全国組織に発展していた。しかしこのときまでに、かつての戦闘的な Industrial Unionism の影響をうけて、マルクス主義の旗印をかかげた労働者教育組織 Plebs League-National Council of Labour Colleges (N. C. L. C.) が、W. E. A. に対抗する勢力をもつようになった。コーンは、W. E. A. の機関紙 *Highway* の中で、労働者教育の危機を訴えて、次のようにのべている。「Plebs は否定するが、私は教育とプロバガンダとのあいだを区別しようとするものである。政治上および産業上の活動では、

私は他の人々を説得して、私の意見をうけいれさせようとつとめるプロバガンディストであるが、教育では、私は彼らを助けて、彼ら自身の考えを生まれ出させようところをみる助産婦である」と。⁽¹⁾しかし彼は、Plebs の W. E. A. 批判にも十分な理由のあることを認め、W. E. A. と N. C. L. C. のいずれを支持するかは、夫々の労働組合の自由であるとし、一九二五年、E. U. C. が、両者の調停に成功したとき、彼は、「労働者教育の歴史に新しい一章がひらかれた」として、これを歓迎している。⁽²⁾當時 E. U. C. は、「赤い伯爵夫人」として有名な Countess of Warwick の邸宅 Easton Lodge に、労働者カレッジを設立する準備を進め、コールが、その学長に就任するものと予想されていた。しかし E. U. C. は、一九二六年の General Strike によって大きな打撃をうけ、この計画の放棄を余儀なくされた。⁽³⁾しかし、コールはその後も、オックスフォードの労働者学校 Ruskin College の顧問をつとめるなど、労働者教育に強い関心を示している。

(1) *Highway*, Winter, 1923.

(2) *Highway*, Summer, 1925.

(3) *Highway*, Oct. 1926; *Countess of Warwick, Life's Ebb and Flow* (1929), pp. 265—270.

一方、一九二四年の第一次労働党内閣の崩壊後、とくに炭坑労働者の賃銀切下の問題をめぐって、労働運動も再び戦闘的となった。このころ、共産党以外の左翼を代表した機関紙は *Lansbury's Labour Weekly* であり、コールは、その社説担当者の一人であった。一九二六年五月の General Strike は、F. D. C. と保守党政府との真正面からの衝突であった。コール夫妻はオックスフォードでストライキ委員会をつくり、ストライキ破りにかけつける学生をあいで啓蒙につとめたが、同時に、革命を目的としない General Strike の限界を知って、一部の自由主義者や教会人と協力し、平和的解決に努力した。結果は組合側のみじめな敗北に終わったが、コールは、*'The Strike: Striken'* という諷刺劇——コール夫人によれば「もともと正確な」ストライキの描写——を書き、それはその後、学生演劇グループによって、時折、上演されてくる。⁽¹⁾

(1) Margaret Cole, *Growing Up into Revolution*, p. 124.

このあと、労働組合運動は全体として、階級調和の方

向に進むように思われた。そして一九二九年には第二次労働党内閣が組織され、議会政治にたいする関心も高まった。この年、コールは *The Next Ten Years in British Social and Economic Policy* を出版し、社会主義に関する彼の見解が「世の中の変化とともに必然的に変化した」ことを明らかにした。「人間は自由であることを強制されなければならないと、私はかつて説いてきた。……私は政治的意識をもった人のユートピアをつくりあげた。……「しかし」実際のところ、もちろんこうしたユートピアは、全く存在し得ないであろう。」それは、ギルド社会主義社会建設計画の放棄であり、同時に、ファンタジーから実際の結果をもつ実践へと、彼の社会主義思想の推移を示すものであった。もちろん、ギルドの構想にみられた、人間の自由と自律という理想主義的要素は、ひきつづき彼の思想の背景をなすものであったが、彼はかつての反議会主義をすて、労働問題、産業問題の政治的解決に、大きな期待をもつようになった。

(1) Cole, *The Next Ten Years*, etc., pp. 160—1.

* * *

しかし、コールの実際政治への道には、さらに大きな失望が待っていた。第二次労働党内閣(一九二九—三一年)のあいだ、彼はしばらく、次期国会選挙の Birmingham-King's Norton 地区労働党候補をひきうけたこともあり、また切迫した内外の経済状況に対応するために MacDonald の設けた Economic Advisory Council の一員として、活躍したこともあった。彼はまた、*Gold, Credit and Unemployment* (1930) を書き、その中で、労働者の購買力をかため、生産を拡充する必要を説き、政府に外国為替管理の実施を勧告したこともあった。しかし、MacDonald 内閣は、英国の財政危機を誇張宣伝する金融界の圧力と策謀の前に、その弱体ぶりを暴露して、総辞職した。その上、MacDonald 自身は、保守党と提携して挙国内閣を組織し、新しい政府によって失業手当の実質的引下が行われた。当時コールは、Bevin とともに *The Crisis* というパンフレットを書き、金融界と国民との利害の対立から説きおこして、銀行業の国有化を強く訴えている⁽¹⁾。彼はまた、指導者を失った新しい労働党が

「改良主義的リベラリズムの遺産をすて」て、自らを再建するよう呼びかけたが、⁽²⁾ 当時の労働党左翼の動きは、実際政治から彼をさらに遠ざける結果となった。

- (1) Cole and Bevin, *The Crisis* (n. d.), pp. 37 f.; Cole, *A History of the Labour Party from 1914* (1951), pp. 252—7.
 (2) *New Statesman and Nation*, Nov. 14, 1931.

一九三一年のはじめ、コール夫妻は、Warwick 伯爵夫人の Easton Lodge で、新しい社会主義組織の準備を進め、同年、社会主義政策に関する調査研究を行うことを目的とした New Fabian Research Bureau (N. F. R. B.) (委員長 Attlee、名誉書記長コール) および、その調査の結果の宣伝教育活動を行う Society for Socialist Information and Propaganda (S. S. I. P.) (委員長 Bevin、副委員長コール) が組織された。しかし翌一九三二年、従来労働党内左派を形成していた I. L. P. が、労働党離脱をきめたとき、I. L. P. の労働党内残留派は、S. S. I. P. と合同して、社会主義連盟 Socialist League を設立し、旧 I. L. P. に代って、党内左派を形成した。コール自身は、労働党内の摩擦をさけ、むしろ党外にあって、労働党主

流派の政策に影響をあたえることを主張した。彼はまた、Stafford Cripps などの知識人の多し Socialist League が、Bevin の指導的地位を拒否したことにも批判的であったが、しばらくは大勢に屈して、Socialist League の執行部にも参加した。しかし、やがてこれをやめ、その後は N. F. R. B. の仕事に専心し、それは一九三九年のフェビアン協会再生の母体となった。

上述のように、コールは、今や英国最大を誇る運輸一般労働組合の指導者 Bevin と密接な関係にあり、Bevin がはじめた、労働者のための *New Statesman* 紙ともいへき *New Clarion* (1932—4) にも協力したが、しかし Socialist League の設立は、コールと Bevin との間に、みぞを作る結果となった。事実、コールは Bevin を「前進した社会主義政策へと労働運動を指揮するようにマークされた人物」とみなしていたが、Bevin 自身は、社会主義イデオログに失望し、「急角度に右派へ」追いやられることとなった。(1) 彼は、後にコールにたいし、知識人は「道先案内として信頼できないばかりでなく、仲間としてはさらに信頼できない」と書いてくる。(2)

(1) Cole, 'Ernst Bevin,' *New Statesman and Nation*,

April 21, 1951.

(2) Bevin to Cole, Jan. 25, 1937, quoted in Bullock, *Ernst Bevin*, p. 532.

一九三〇年代を通じて、コールは当然のことながら景気回復の問題に強い関心を示し、*Studies in World Economics* (1934), *Studies in Capital and Investment* (1935) などを書いてくるが、一九三六年、J. M. Keynes の *The General Theory of Employment, Interest and Money* が出版されたとき、彼はこれを「マルクスの資本論以来もっとも重要な理論経済学の書物」として歓迎した。(1) しかし後になって、彼は、ケインズ経済学が社会主義にとって代ることを恐れて、ケインズ批判を書いており、いわゆる「ケインズ革命」は「ホブスン革命」であったとして、コール自身が多分にその影響をうけている J. A. Hobson の過少消費説の意義を、むしろ重要視している。(4)

(1) *New Statesman and Nation*, Feb. 15, 1936.

(2) Cole, *Socialist Economics* (1950), pp. 49—55.

(3) *New Statesman*, July 5, 1958.

(4) Cole, 'J. A. Hobson,' *Economic Journal*, June—Sept., 1940.

他方彼は、世界不況の波に影響されずに五ヵ年計画を

推進するソヴィエト連邦の社会主義経済建設に大きな魅力を感じていた。⁽¹⁾一九三二年の夏、ニコラエフがソ連邦に視察団を派遣したとき、彼は病床にあったがコール夫人はこれに参加し、帰国後、婦人少年問題、とくに社会活動の各分野における男女の平等について報告した。⁽²⁾

一九三四年、Bolshevik No. 4といわれた Sergei Kirov の暗殺にたいし、ソヴィエト政府が凶人の大量処刑という報復手段をとったとき、コールはロンドンのソ連大使に抗議をしているが、しかし彼は、一九三六―七年の叛逆罪裁判の結果を、当時はそのままうけいれて、Karl Radek を「自ら告白し、自らをだました反革命の手先」とよんでいる。⁽³⁾

(1) Cole, *The Intelligent Man's Guide Through World Chaos* (1932) 参照。

(2) Margaret Cole (ed.), *Twelve Studies in Soviet Russia* (1933), pp. 177—208.

(3) Cole, *The People's Front* (1937), p. 43.

一九三〇年代は、マルクス主義が、英国でもっとも広汎にうけいれた時期であった。コール自身、マルクスによって「深く影響された」ことを認めているが――

コールは結婚後まもなく夫人に *Das Kapital* を読んでさせている――しかし彼は、マルクス主義をドグマとして、「社会主義正統派の阿片」としてうけいれることを拒否し、マルクス主義者は、その歴史観からして必然的に「修正主義者であることを強要される」とのべている。⁽¹⁾

彼は、一九〇三年、Everyman's Library から出版された *Capital* (Eden and Cedar Paul 訳) に序文を書き、その中で、資本主義搾取の関係を示すものとして剰余価値理論を採用しても、労働価値論そのものは不必要であるとしている。しかし、彼が修正の必要をもっとも強く感じたのは、マルクスの小ブルジョア階級の理論であり、マルクスの考えたような、衰退する生産様式に依存する古い型の小ブルジョアジーのほかに、資本主義大企業的发展に伴ってつくり出される新しい型の小ブルジョアジーがあり、彼らの経済力は限られたものではあっても、政治的にはファシズムの温床として、無視できないことを強調し、同時にファシズムは、たんに階級感情では説明できないことを指摘した。⁽²⁾ 彼は後に、ファシズムの性質について、それは「近代社会の階級分立をこえて、

原始的な種族団結の状態にもどるものであり、階級の運動ではなく、原始種族の運動である」として、階級史観だけに依存することを批判している。

(1) Cole, *What Marx Really Meant* (1934), pp. 7, 45, 291.

(2) *Ibid.*, pp. 42—3, 126—131.

(3) Cole, *The Meaning of Marxism* (1950), p. 146; Cole, *Socialism and Fascism* (1960), pp. 3—9.

こうしたファシズムの擡頭と、ヨーロッパの新しい政治情勢に直面して、彼のかつての人道主義的な戦争反対の態度さえ、次第に修正されることとなった。一九三五年のアビシニア戦争のときには、コールは、ムッソリーニの軍事作戦を阻止する計画を、ロンドンの絵入り新聞に発表した⁽¹⁾。コール夫妻は、一九三三年スペインに旅行し、フアランへ党の動きに注目しているが、内乱勃発にあたって、共和国政府にたいする援助活動——彼はこれを「民主主義にたいする投資」とよんだ——に協力し、他の多くの進歩人と同じく、彼自身、英国へ避難したバスク少年をひきとったこともあった。

(51) 学 界 展 望

(1) Malcolm Muggeridge, *The Thirties in Great Britain* (1940), p. 144.

一九三五年のコミンタールの戦術転換以来、英国共産党は、労働戦線の統一の上に人民戦線を結成する努力をつづけ、一九三七年のはじめ、I. L. P. Socialist Leagueとともに、左翼統一運動をはじめたが、共産党との協力を嫌う労働党は、ただちに、その加盟団体である Socialist League を除名した。こうしたとき、コールは、それ自体、人民戦線運動の重要な一環をなしていた Victor Gollancz の Left Book Club シリーズの一部として、*The People's Front* (1937) を出版し、労働党の異端糾問の態度を強く非難した。ファシズムの脅威に直面しようとする政府を打倒するためには、現在の労働党だけでは不十分であり、広汎な民主勢力の結集が必要であるが、同時にそれは「世論の大衆運動」によって、政府に政策の転換を余儀なくさせることを目的とすべきであり、したがって左翼政党的運動としてよりも、rank-and-file の運動として組織されるべきものとしている。そして左翼統一運動が、政府の軍備拡充政策に反対していることを、非現実的であると、ファシズムの脅威に対し、軍備の必要、そして英仏ソ連の相互安全保障の必要を説いて、彼の立場を明らかにした⁽¹⁾。彼は J. T. Murphy な

この People's Front Propaganda Committee にも参加し、Raymond Postgate の人民戦線月刊紙 *Fact* の編集委員の一人として活躍したが、この運動は政党や組合の既成勢力に浸透できず、一九三九年を迎えることとなった。

(1) 人民戦線運動の国内政策については G. D. H. & M. Cole, *The Condition of Britain* (1937) を参照。

この年の夏、コールは「ヒトラーとチェンバレンからぬけ出すために」スコットランドで休暇を過していたが、八月には独ソ不可侵条約が締結され、九月にはドイツ軍のポーランド侵入、英仏の対独宣戦布告によって、ヨーロッパは第二次大戦に突入した。彼は英国政府が「スターリン阻止」の冒険に出ることを恐れ、「ヒトラー阻止」だけでは、連合国の戦争目的として不十分であると考へ、ただちに *War Aims* というパンフレットを書いた。ナチスがソ連の主要な敵であることからすれば、独ソ不可侵条約は、本質的にまちがったものであるが、ソ連邦の立場からすれば、その締結にいたった事情は、十分了解できるものであるとし、戦争そのものについては、ドイツ内部の民主的勢力の勝利を助けることが、英仏両国の主要目的であるべきものとしている⁽¹⁾。そして一

九四一年、ドイツ軍のソ連領侵入とともに、彼にとつては、戦争は、社会主義のための戦争という新しい意味をもつようになり、彼を中心とするフェビアン協会員のあいだで Socialist Propaganda Committee が組織され、その活躍によって、フェビアン協会そのものが強化されて行った⁽²⁾。

(1) *New Statesman and Nation*, Nov. 4, 1939. 後に彼は、一九三九—四〇年のソ連外交政策について、きわめて批判的となつてゐる。Cole, *Socialism and Fascism*, p. 316 参照。

(2) Cole, *Fabian Society, Past and Present* (1947 ed.), pp. 14f.

戦争中コールは、政府の労働力および軍需品生産調査や、オックスフォードに新しく設立された *Nuffield College* の社会再建調査に協力した⁽¹⁾。一九四二年に発行された *Victory or Vested Interest?* というフェビアン協会の出版物の中で、彼は、労働組合が、いわば労働の動員を行つてゐるのにたいし、資本の動員が行われていない事実を指摘し、計画計済の必要を説いた。一九四五年総選挙における労働党の勝利、そして枢軸国の降伏によつて、彼の努力は、一応むくいられたようにみえた。しか

し彼は、社会主義英国建設の将来に横たわる内外の危険を痛感し、党よりも世論の育成に、全力を傾けるようになった。⁽²⁾

(1) Cole, 'The Man-Power Problem,' *Political Quarterly*, April—June, 1941. 彼は Nuffield College の Sub-warden, Fellow などをつとめ、現在、同カレッジの図書館はコールの蔵書を保有してゐる。

(2) Cole, *Great Britain in the Post-war World* (1942) 参照。

* * *

一九四五年、コールは、労働党の選挙プログラム *Let Us Face the Future* を条件つきで支持して、オックスフォード大学選挙区から立候補し、三千票以上を獲得したが、当選できなかった。事実、二〇年代三〇年代には、彼は、労働運動の知的指導者として特異な地位を占めていたが、戦後は、労働運動自体、自己充足的な巨大な組織をもつようになり、フリーランスの知識人の影響を、今まで以上に疑惑の眼をもってみるようになった。他方、コール自身、労働運動のテクノクラティックな傾向にはげしい失望を抱くようになり、彼と労働運動指導者との

関係は、ますます疎遠となった。労働党の国有化、社会保障、教育改革の諸政策も、彼を満足させるものではなかった。一九四九年、労働党が 'Labour Believes in Britain' と題する政策方針を発表したとき、彼は、党の指導層が、社会主義の目標を放棄し、Mixed Economy を社会問題の終局的解決策としているものと非難した。⁽¹⁾ 彼はまた、福祉国家の出現にもかかわらず、従来通りの階級構造が温存されている事実を指摘し、国有化案についても、その成功は、労働者による産業自治の達成いかんによるものと考へた。⁽²⁾ 一九五一年の総選挙によって、六年間の労働党政権に終止符がうたれたとき、彼は、党が野党として議会外からの世論の影響に敏感になるものと期待し、同時に自らそうした世論に働きかけるものとして、経済危機と軍縮をめぐる、党内左派と組合指導者との争いについては、労働党支部と組合支部とのあいだの、地方のレヴェルにおける協力を強く訴へた。⁽³⁾ 彼はまた、社会主義を、貧富の問題としてよりも平等の問題としてとり扱う「新しい左翼の理想主義」を主張した。彼によれば、社会主義は福祉国家以上のものであり、それは階級障壁の打破を意味する——したがって、Atlee が伯爵の称号

をうけたとき、それが社会主義を墮落させるものとして、彼は「怒りを感じた以上に、悲しみ、傷つけられた⁽⁴⁾」であった。

- (1) Cole, 'The Dream and the Business', *Political Quarterly*, July—Sept., 1949. 労働党、労働組合にたいする、当時のコールの見解については、Cole, *Labour's Foreign Policy* (1946); 'From War to Peace in Industry', *Political Quarterly*, July—Sept., 1945; 'The National Coal Board', *P. Q.*, Oct.—Dec., 1946; 'Trade Unions, Workers and Production', *P. Q.*, July—Sept., 1947; 'Trade Unions and Trade Unionists in Britain Today', *P. Q.*, Jan.—March, 1949. なぎき参照。
- (2) *New Statesman and Nation*, May 5, 12, 1951, Jan. 31, 1953.
- (3) *Ibid.*, March 8, 1952; Cole, 'The Labour Party and the Trade Unions', *P. Q.*, Jan.—March, 1953.
- (4) Cole, *World Socialism Restated* (1956), p. 29; *New Statesman and Nation*, Nov. 21, 1953.

Kingsley Martin が指摘しているように、コールの影響力は、どこからかといえば、彼のおびただしい著作や労働運動にたいする直接の働きかけよりも、むしろ大学教師として、彼がその「個性と誠実と献身」とによって、数世代の学生たちにあたえた感化の力から生じたもので

あった。⁽¹⁾一九四五年、彼は、オックスフォード最初の社会政治理論の教授に就任したが、その開講講演の中で、彼自身、社会理論家として、現存の社会制度にたいし、積極的に価値判断を行う旨を明らかにした。⁽²⁾彼の指導の下に、オックスフォード大学の労働クラブは、もっとも有力な学生組織に発展し、同時に彼は、大学院学生の研究指導にも奔走し、Asa Briggs によれば、コールは「オックスフォードの社会研究そのもの」とみなされるほどになった。⁽³⁾彼は、新しい時代の要請する社会研究の専門化の傾向にたいし、「総合的な物の見方」を力説し、学生、教師ともに「考える余暇」をめぐることの必要を強調した。⁽⁴⁾

- (1) *New Reasoner*, Spring, 1959.
- (2) Cole, *Essays in Social Theory*, pp. 7—10. 経済学にふつじ Cole, *Socialist Economics*, Ch. III を参照。
- (3) *New Reasoner*, Spring, 1959.
- (4) Cole, 'The Social Studies in Universities', *P. Q.*, Oct.—Dec., 1944. なぎき、Universities and the Future, *New Statesman and Nation*, July 18, 1953. 参照。

その間、コールは、英国社会主義の行きづまりは、福

社国家の建設そのものが、アメリカの経済援助に大きく依存したことによるものと考え、東西冷戦の悪化とともに、英国の対米依存にますます批判的となった。彼は朝鮮戦争を「市民戦争」と規定し、彼自身、共産主義には共鳴できないが、アメリカの援助によって支えられた朝鮮の「反動的地主政治」よりも、北鮮政府による朝鮮の統一を、「きわめて不愉快な状況からの最少不愉快のぬけ道」であると考えた。⁽¹⁾ 彼は、西ドイツの再軍備にも極力反対し、唯一の布望は、「新しい戦争を回避し、過去の時代に、カソシズムとプロテスタンティズムが、また回教とキリスト教とが、どうか共存し得たように、共産主義と資本主義と社会主義とが共存するような、そうした世界を基礎にする、国家間の緊張緩和に努力することである」とのべている。⁽²⁾ 一九五六年のハンガリー「革命」については、その「市民戦争」から生ずる右翼独裁の危険にたいするソ連邦の配慮は理解されるべきであるが、しかし、外部からの干渉は道徳的にまちがっており、各国民がその政体を、よかれ悪しかれ、自ら選ぶ権利を尊重すべきものと考えた。⁽³⁾ 彼はまた、西欧の民主的社會主義が、その漸進的プログラムの行きづまり、大西洋同

盟への依存、労働組合の圧力団体への転化などの原因により、「袋小路」に入りこんでいる現状をうれい、その打開のために「世界社会主義者団」World Order of Socialistsの設立を提唱した。それは、究極的には西欧社会主義とソヴィエト共産主義との和解と協力とを目的とした、世界的な規模をもつ、一種のフェビアン協会を組織しようとするものであり、夫々の国の社会主義政党に拘束されることなく、弾力性のない教条主義を排斥し、「各国の献身的な少数派の十字軍運動」として、個人間の接触による、いわゆる「浸透」の戦術によって、夫々の国の社会主義指導者の政策に影響を及ぼそうとするものであった。⁽⁴⁾ 一九五五—五六年にかけて、彼のこうしたよびかけから International Society for Socialist Studies (I. S. S. S.) が生まれ、彼自らその会長となり、主としてフランスの社会主義者と協力しながら、その晩年を国際社会主義の統一戦線結成のための努力に捧げている。彼の最後の、もっとも長い、そしておそらくもっとも重要な著作 A History of Socialist Thought (1953—60)⁽⁵⁾ は、社会主義運動の生きた百科辞典としての彼の面目を十分に発揮したものであるが、同時にそれは、I. S. S. S. にみられる

ような実践的意図にも役立つとするものであった。彼は、東西兩陣營のたんなる平和的共存には満足せず、戦争の恐怖からの人類の解放も、それだけでは、社会民主主義と共産主義とのあいだの距離を縮めるものではないと考えた。前者は個人の権利から出発して社会的権利の方向に進もうとするものであり、後者は階級の権利から社会の権利を樹立しようとしている。兩者夫々、自らの体制のうちに長所短所をもつものであり、したがって、夫々の業績を誇りとし、夫々の欠点に批判的であるべきものとし、さらに、後進諸国における社会主義の将来については、これを西欧的基準で判断すべきではないとして⁽¹⁾いる。最後に彼はつけ加えていう。「私は共産主義者でもなければ、社会民主主義者でもない」というのは、私はこの両方とも、中央集権および官僚制度の信条とみなすからである。これにたいし、人類同胞という、その平等主義諸原則に忠実たらんとする社会主義社会は、民主的自治の仕事に、できるだけ多くの市民の積極的参加を確保するため、権力と責任との、できる限り広汎な分散に、よりどころを求めるものでなければならぬと思う⁽²⁾。」

(1) *New Statesman and Nation*, Feb. 3, 1951. 彼は、朝

鮮戦争について、労働党、フェビアン協会と意見を異にし、そのため協会委員長を辞職している。

(2) *Ibid.* 一九五六年、ソ連邦におけるスターリン批判のあと、彼は *Daily Worker* に呼びかけて、共産主義と社会主義との協力の必要を説いている。

(3) *New Statesman and Nation*, Jan. 12, 1957. マクス問題にたづなずる彼の見解については *Ibid.*, Oct. 27, 1956 を参照。彼は、ソングリー事件後の、英国の新しい左翼の動きを代表する *Reasoner* 及び *University and Left Review* に協力した。

(4) *New Statesman and Nation*, Jan. 15, 22, 1955.

(5) Vol. I. *The Forerunners* (1953); Vol. II. *Marxism and Anarchism* (1954); Vol. III. *The Second International* (2 parts) (1956); Vol. IV. *Communism and Social Democracy* (2 parts) (1958); Vol. V. *Socialism and Fascism* (1960).

(6) *New Reasoner*, Summer, 1958.

(7) Cole, *Socialism and Fascism*, p. 337.

コールは長いあいだ、糖尿病になやまされてきたが、一九五九年一月十四日、六九歳で死亡した。*The Times* の obituary によれば、彼は、時代の必要に自らの見解を適応させ、したがって社会主義のどの種類にも属さないものとされているが、彼の生涯を一貫したものは *WIL-*

Ian Morris の社会主義——人間フェロウシップの理想であった。ギルド社会主義社会における、人間の自由と自律の夢が消えたあとは、彼は主として、労働運動の主流の外にあって、自由な立場から、世論に働きかけようとし、ファシズムの脅威にたいし、そして冷戦の重苦しい圧迫にたいし、社会主義勢力の結集のために努力した。コールの追想記のほとんどが一致して指摘していることは、彼の特異な個性であった。ときには知的な不寛容ともみられる、彼の冷い理性のうらに、思いやりと感

受性と、相手の大小問わずさしのべられる我慢づよい援助の手があった。「プリンシプルと理性の力とに、あれほど深い信念をもった人にとって、おそらく皮肉なことであるが」と、彼の大学の同僚の一人は書いている——「彼の一番大きな影響は、結局は、彼自身の善良さから生じたものであったかもしれない。」⁽²⁾

(1) *The Times*, Jan. 15, 1959.

(2) G. D. N. Worwick in *Essays in Labour History*, p. 40.

(一橋大学助教授)